

東工大附属科学技術高等学校

教育後援会だより

第7号

2006.3.1 発行

東工大附属高校で「最近の調査結果」

入戸野 修

東工大名誉教授、工学博士、前本校校長、
現在 福島大学 共生システム理工学専攻教授

「最近の調査結果」

経済協力開発機構（OECD）の調査によると、わが国の初等中等教育および高等教育への投入経費は国内総生産（GDP）比で比べ、OECD加盟国（30）の中で最低グループに属する。また、別の調査によると、わが国の科学技術についてある程度の知識を持っている一般市民の割合はギリシャやカナダよりも低い。理科が大好きまたは好きな生徒が将来科学を使う仕事をしたいと考えている割合は、シンガポールや韓国と比べてかなり低い。科学創造立国を標榜するわが国としては何ともお寒い現状である。現在、世界的に理科離れが問題になっている。わが国の場合、小学校教諭の免許認定が30〜40年前の理科を必須科目としていない教員養成のあり方が遠因と言われている。理科は知識を記憶することと捉え、児童に記憶させる教育が主流であったのです。望ましいのは、獲得した知識を基に推論し、仮説を立て、それを実験・検証することで自分が理解し相手にも納得させる考え方です。自分自身の考えや答えを持つことを「個性」と言います。個性を大切にすることは、思考様式が形成される小さい時からの教育環境は特に大切です。同時に、自然と接することで培われる感

性に基づく教育環境の整備も重要です。人材育成は国策の根幹ですが、子供たちと接する機会の多い私たちにもわが国に相応しい科学技術教育のためにできることがあるのではないだろうか。

「科学的思考」

福沢諭吉は、学生には最初に自然科学を教え、その後「経済学」「法学」などを学ばせることを主張しました。そして、「この順番は決して変えてはならない」と言ったそうです。この考えは、欧米では科学的思考が日常生活の中になじり根付いているのを目の当たりにした体験から発したと思われまします。欧米では、自然現象に対しては、科学的思考の方が日常の判断や直観的判断よりも的確な判断を与えると「言うことを小さい時から体得させられているのです」。

科学教育を実践することはそう簡単ではない。実際に、自然科学の現象を理解するとき、白紙の状態にある生徒達は、その科学について学ぶ前に目にした現象について常識的な考えを持っており、新しい現象についても直感的あるいは常識的な類推に基づいて判断を下すものです。したがって、科学上の概念や法則を機械的に覚えさせることは容易であっても、それらの概念や法則を真実なものとして迎え入れさせ、活用させるのは難しい。自然現象を理解させることと、理科の問題を解くこととは別ものです。生徒自身の常識的論理や直観的判断よりも科学上の概念を元にした科学の論理や考えの方がいかに優れているかを身にしみて感じさせる体験を与えるのが先生の役目です。そのため、教える立場にある者は絶えず切磋琢磨することが要求されます。

まして、科学技術は日進月歩で、常に新しく進化しています。科学研究や科学技術の考え方は、一般社会での常識や社会通念とは必ずしも相容れない関係にあります。ですから、既存の考え方や固定概念に囚われ過ぎることとは科学技術教育に携わる者、特に研究者・技術者・教員（先生）にとってはご法度とされています。

人間は生き物です。生き物は絶えず環境に適応して進化する宿命にあります。固定概念や規制・制約を別の視点から見直す、新しい思考の展開と解決策が見つかるものです。思い込みを無くして一歩踏み出し壁を越えようと、新しい考え方を獲得できません。また、異なる意見にも耳を傾け、他人と異なることを意識し過ぎないで自分の考えを持ち、それを堂々と述べること（個性の確立）が、新たな環境への最適な適応を可能にします。特に、固定概念に囚われていない初等中等教育段階では、子供たちを取囲む周囲が一同となって将来に開花するような個性を育む教育環境を完備する取り組みが大切です。

「科学技術リテラシー」

これからの時代は今までのように文系・理系と分ける考え方は複雑な社会構造のさまざまな課題を解決できません。その良い例が地球環境問題です。環境持続か、経済優先かの二律背反する課題に最適な解決策を求めするには単一な概念、単一な学問体系からの知識だけでは不可能です。そのため、理系の学生も法律や工学倫理の知識は欠かせません。文系の学生も、科学や技術の影響を理解し、判断し、意思決定する能力を身に付けることが重要です。また、科学者には一般社会に対する意識改革が必要となります。研究論文という科学コミュニティのみに役立つ成果ばかりでなく、一般市民が理解できる易しいことはで自然現象を説明するなどの実践活動が望まれます。さらに、政策決定に責任と権利がある一般市民にも科学技術に関わる素養が必要となります。それゆえ、国民が身に付ける汎用性のある科学技術の読み・書き・理解する能力（科学技術リテラシー）の涵養が強く望まれています。次世代を担う子供たちが科学技術リテラシーを身に付けることで、自分の人生を物質的にも精神的にもより豊かにすることができ、また、不必要な不安を抱かずに済んだり、複雑な社会の様々なリスクを回避できたり、複雑性を理解したりすることに役立ちます。現在、

わが国は教育に対するグランドビジョンとともに、科学技術リテラシーのあり方について国を挙げて取組む動きがあります。各方面の教育現場からの適切な意見を取入れ、より質の高いものを創り上げることを目指しております。それにより、理科・数学・技術に関する知識・技能・物の見方の理想像を提示し、教える側も習う側もどこまで知っていれば良いかの指針を熟知した上での教育指導ができるようになります。また、日本の言語・文化・技術力・社会状況・日本人の感性に根ざした読み書き能力を持ち、しかも科学の本質・数学の本質などについて誰にでも分かりやすい言葉で伝える能力を育むことができるような教育環境の整備が普及します。現在、高等教育機関には、今まで以上に地域社会に開かれた啓蒙教育活動の展開が、また、一般市民には教育活動への直接参画が強く望まれております。今後、大学を中心に、本校をはじめとする高大連携や科学技術教育の改善と新展開への積極的な取組みが期待されます。

「市民の教育への参画」

国立大学が法人化されて、大学は単に人材を育成し、研究論文を発表するだけでなく、地域社会や一般市民に具体的に役立つ社会貢献が強く要請されています。社会から真に存在感のある大学として存続するには、地域社会の教育・研究への意見を取入れて反映する組織的な仕組みが期待されています。こうした時代背景の中で、大学教育と高等学校教育のあり方について時代を先取りする取組みができるのも附属高等学校を有する大学の役割であると考えます。そう考えると、本校が国立大学法人東工大附属高校であることは、わが国の科学技術教育の将来に向けて重要な意義を持っています。教育後援会という立場から、科学技術創造立国を標榜するわが国の科学技術教育のために、子供たちの教育環境の改善について建設的に提言できることがあるのではないのでしょうか。

創立120周年・再誕元年に思う

市村 益男

…… 高大連携教育を中心として

本校副校長

明治19年（一八八六年）1月21日に創立された本校は今年度で創立120年を数えることになった。当初は、現在の「橋大学の前身であった東京商業学校の附属だったというのだから驚きである。一橋といえは、現在東工大が連携している四大学連合の同士の一つである。縁（えにし）の深さを思わせられる。

その本校が、時代の要請に応じて、新しい科学技術教育の任務を帯びて改組を行った。工学部の附属から大学全体の附属へと変わり、名称も、「東京工業大学工学部附属工業高等学校」から「東京工業大学附属科学技術高等学校」に変更した。従来の5学科の壁を低くして、科学・技術科1科とし、その下に5分野を置くという体制になったのである（1学年5クラス、定員200名は変わらず）。

運営体制としても、副学長を委員長とし、理学部、工学部、生命理工学部3学部の学部長、事務局長を含む「附属科学技術高等学校運営委員会」（本校からは、校長、副校長、研究主任、教務主任が参画）なる組織が設けられた。東京工業大学の一部局として、堂々と認知された格好である。ただ高校としての主体性を維持していくには、高校教員の相当の努力が必要となるではあろう。

教育内容の変更点全般については、他のところでいろいろ伝えられているので、ここでは年々強化が進んでいる高大連携教育について少し詳しく述べてみようと思う。

本校が公式に高大連携とよべる授業を開始したのは、初めて研究開発校の指定を受け、新聞発科日「技術と文化」で当時の校長平井聖先生がテーマを担当された昭和58年度に遡る。その後この「技術と文化」（平成7

年度からは「人と技術」と科目名を変更）の授業の一端として主に歴代の校長による年に1回の特別講演、さらに学年を生徒の興味に応じて5つに分けての年に1、2回の特別講義へと発展させ、この形態は現在も続いている。

平成12年度にSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受け、2年生対象の「先端科学技術入門」の開発が始まり、高大連携の教育が一気に本格化した。この科目は先端をいく科学技術の開発、研究にも、如何に基礎的な理数の力が必要かつ重要であるかを生徒に認識させることを目的とする科目である。

この授業では各学科が年間6テーマを設定し、1テーマに4時間をかける。3週目を大学の先生の授業にあて、1、2週目で本校の教師による予備授業、4週目にはまた本校の教師がまとめの授業をする、といった流れで進めており、大学教員と本校教員が緊密に協力し合いながら、授業を構成し、実施している。これはどの協力体制は恐らく他校では見られない、あるいは他校では不可能なものと思われる。

もう一つの大きな連携体制は、昨年度より新たに始まった特別選抜制度である。これは毎年10名程度の生徒を指定校推薦的に、本校から東工大に入学させるという制度であるが、単なる入試制度の新設というのではなく、新たな科学技術教育の一端として、高校・大学・大学院と連続して学習・教育することを目的としている。科学技術系大学の入試をペーパーテストだけで済ます制度の悪弊は関係者の間ですでに周知のこととなっている。新たな制度のもとでは基礎学力は言うまでもなく、高校段階の実習や発表力なども評価の対象とし、さらに3年時の夏休みに行われる2泊3日の研修で大学の教員が候補者を絞り込んでいくことになっている。この研修には大学の先生方が20人以上参加して下さっている。そしてその先生方ご自身がその豪華な講師陣と内容に驚嘆をさっている。本校の生徒に対する大学からの期待の大きさをひしひしと感じる次第である。

いっただまいあつて

平成17年度 教育後援会活動報告

教育後援会会長 小林 晶子



平成17年度の教育後援会の活動をふりかえり、在校生の保護者の皆様や、教職員、会員の皆様を支えられ、一年が無事終えられますことを紙面をお借りして感謝申し上げます。会長をさせていただいて二年、少しでも会員の皆様との親睦や、生徒の教育環境を豊かに出来るため、お役に立てることは何かと、役員一同、知恵を出し合い、力をあわせて活動して参りました。ひとつひとつ活動を振り返り、反省しながら、さらなる一歩前進が出来たらと思っています。

十七年度は、新たに9月21日に「古典芸能鑑賞会」を行いました。立川談幸師匠をお迎えし、在校生の皆様は落語を鑑賞してもらおう事が出来ました。勉強の合間にしばし心をやすめ、日本の伝統的な文化に、楽しくふれることが出来ましたことを、役員一同うれしく思っております。また、生徒の皆様には、会場の準備や後片付けも手際よくお手伝いしてくださり感謝いたしております。

10月8、9日の文化祭バザーには、出店用の品物をたくさんご寄付いただき、また売り手になってお手伝いしていただいた先生方にも助けられ高価な売り上げとなりました。バザーの収益金は、自動体外式除細動器(AED)を購入させていただき、学校に寄付させていただきました。

11月19日の第2回「シェフ大塚のお料理教室」を開催しました。「受験日の朝、脳を活性化させる朝食」をテーマに、楽しくおしゃべりし

ながら、手も口も忙しく、そして手際よく、出来上がりは、さらによし。

これで、子供たちの受験も、会員の親睦もバッチリとはかれたのではないかと思います。

年が改まり、平成18年2月18日は、目黒区駒場の旧前田侯爵邸に、第3回目となりました建物見学会を行うことが出来ました。

「こだます」という行為は、相手の心に添うという行為でもありません。かつて、私たちは、こだましてくれる大人に囲まれて生活していたように思います。転んで「痛い」と言ったら、「痛いね」と親も先生もこだましてくれました。

こだまは「ヤッホー」と言ったら「ヤッホー」と返ってくるのです。教育後援会の活動も、会員おひとりおひとりの「こだま」があつてこそ成り立っていくものと思います。「ヤッホー」と呼びかけてもかえってこない淋しさは、どこにいけばよいのでしょうか？

国立大学附属学校から独立行政法人となった中で、これからの教育後援会の役割は、どのように会員の皆様の心に「こだま」していけるだろうか日々考えさせられます。

今、人だけでなく、動植物とも、地球とも、宇宙とも「こだま」しあいひびきあうことが大切です。そのためにも、今、目の前にいる大切な存在と、こだましあう事から始めようではありませんか。

科学技術高校で学ぶ生徒たちのためにも、教育後援会では会員の皆様と、こだましあい、よりよい教育の場をつくりあげていけたらと思っております。

今後とも、生徒の教育支援のために、会員の皆様の温かい御支援、御協力を宜しくお願い致します。

今こそ技術者モラル教育を！

遠藤 信一

昭和55年電気科卒業
現 東工大附属科学技術高等学校・教諭

本会報をお読みの皆様には、電気科の卒業生というよりも社会科の先生というイメージが強いと思います。悩みなどないように思われている私も、不惑の年を越える際に、自分のありかたを反省しました。そして、世の中の役に立つ、実学の普及こそ善であるという考えから、新たに技術教育の手助けをするを目標に掲げました。反省などと格好の良い言葉を使いましたが、やり直すべきことがあるならば、今が最後のチャンスだと思っただけに他ありません。このことは自らの価値観や人生設計において、大きな軌道修正を意味し、様々な意味で大きく揺らいだ年でもありました。不惑となるために最後の感いをしたというわけです。それ以来、頭を垂れて勉強をし直す日が3年余り続いています。

哲学は科学……

マルチな芸能人を指す時に「歌って踊れる」という表現がありますが、私は入職当初「電気がわかる社会科教師」として、特徴が生かせないかと悩んだ考えを持っていました。しかし、いつまでも電気あるいは電気にしがみつくことが、まるで昔の恋人を未練がましく思っているようで、意識的にインド哲学の勉強に励んでいきました。その数年間、私が学んだものは「哲学は科学である」ということでした。ある時、サンスタリット語の翻訳ばかりに明け暮れ、論ずることを忘れていた私に「仮にも哲学を標榜する以上、論文は科学的でなければならぬ」と大学の恩師に諭され、学会発表の論文を書き直したことがありました。教壇を歩いていると難しいことをやさしく咀嚼して相手に伝えることがかりを考へがらです。自分が最善と思っていたこの行為は、単なる教え込み教育の道具でしかありませんでした。このような科類では、生徒諸君に科学的な思考を育てることなど到底できないと、こ

の時はかりは猛省しました。科学的な研究とは、自分自身で仮説を立て、「こうだからこうなのではないか」という設計図に基づいて、証拠を蒐集して論じていくものです。それゆえ、自分に仮説を立てるだけの発想がなければ、研究そのものをする資格がないのだと自身に言い聞かせてきました。

かなわない論客……

平成7年度から始まる研究開発に幹事として参加した時のことです。大学で文章を書く訓練をしてきたということが機軸を生み、テキストや報告書に手を入れ、口を挟むというところがありました。当然の帰結ですが、先生方の不評を買ってしまいました。理由はどうあれ、当時30代後半の若造に文句を言われた先生方が、不快に思われたのは当然のことです。今思い返しても申し訳ないことをしたと赤面するばかりです。この時、高慢な私にも、全くかなわない論客がいました。それは研究開発運営指導委員会の席上に現れました。東京工業大学からいらしたその先生は、「教育工学」という看板を掛けておられ、指導内容はいまいちもつともでした。その場凌ぎの張りばて状態の頭では、到底太刀打ちすることができませんでした。この時初めて実証的な教育研究に触れ、少しばかりのプライドも高慢さも崩れ去りました。研究開発が終わり一段落付いたときに、入口野校長（当時）から東京工業大学で指導を受けてはどうかと勧められた際に、真っ先に教育工学の門を叩くことを決意しました。

今必要なのは技術者モラル教育

私が今、一番必要だと考えているのは、技術者を目指す生徒諸君に、場面に左右されない倫理観を植え付けてもらうことです。そのため、私は次のように考えます。

今日、私たちの身の回りにには、多くの技術製品が存在します。しかし、技術の高度化によって、一般の人々がそれらの製品、製造物の安全性を理解することは困難です。私たちは、技術者を信頼することなく、それらの製品、製造物を受け入れることなどできません。もし、技術者が私たちの信頼を裏切るような事件、事故を起こせば、技術そのものに対する信

頼が損なわれることとなります。それゆえ、高度な技術文明を維持するためには、技術者の倫理教育が必要不可欠と言えます。近年、日本の多くの高等教育機関でも、工学倫理教育の実践がはじまっています。これは、JABBEが行う高等教育機関の技術者教育プログラムの認定要件として、工学倫理教育の履修が義務化されているためですが、社会のニーズも高まりつつあります。他方、工業科の生徒に対しては「工業倫理」の教育が重要だとする学習指導要領の解説があるにもかかわらず、その実践は皆無に等しいのが現実です。

なぜモラル教育なのか。工業科の生徒を対象とした「工業倫理」教育を行う場合、方では、高等教育で行われている工学倫理の入門編を行うという考え方があります。他方、中学校までの道徳教育の延長上で、技術者の置かれる立場に立つて技術者のとるべき行動を考えさせるという立場もあります。現実に行われている工学倫理の教育は、事件が起こった理由や対処法の理解に重点を置くゆえ、方法論の学習になっただけです。このような教育は、職場での体験が無い高校生には、効果的ではないと考えられます。そこで、高校段階であるからこそ、中学校までの道徳教育の延長上で、企業人としての技術者の立場よりも、一人の人間としての技術者がとるべき行動を考えさせる教育が必要であると考えました。私たちの立場は、このような意味で工学倫理とは異なる立場に立つたため、これを「技術者モラル」教育と呼んでいます。

最後に

今日、報道を見るに、教壇に暖かいないほど、モラルの欠如した事件が起きています。企業では倫理教育が急務であると声高に発表し、新聞各紙も倫理教育の実施を呼びかけています。今こそ本校が先導して技術者を目指す諸君のモラル教育を行い、その成果を世に問う時だと思います。「電気がわかる」のではなく、「電気を学ぶ人の気持ちがある」のだと気付くのに20年の時間を要してしまいました。（教育内容の詳細は学校のホームページをご覧ください、メールでご意見頂戴できれば幸いです。）

モンゴル国で真だより

青木輝壽(元副校長)・マサ子



馬頭琴を演奏するK氏

新しい足跡を残すことになった30番目の訪問国はモンゴルであった。一九九二年から民主国家に移行したモンゴルは、今教育改革の最中だ。私はモンゴル教育省に教育行政アドバイザーとして派遣されたK専門家の献身的な国際協力に共鳴し、工業教育研究所を辞して、妻と平成16年8月に首都ウランバートルの地を踏んだ。



ロシア風建造物の教育大

勤務先は、国立教育大学の工科大学学部でボランティヤ情報技術アドバイザーとして勤務。妻は日本語と日本語の教師として教育大、ビジネス大、エレル初等中等学校に勤務。

さて9月1日は授業開始で3校の式典に参加した。雨の少ない国なので式典は玄關の階段を利用して民族衣装などで着飾った生徒・学生や先生方はさすが綺麗であった。アトラクションはプロの音楽家や演奏家、コントやダンス、生徒の演芸等が披露される。



工科大学部長夫妻に和服を、私共は伝統衣装アールを着て

日常生活上では停電、断水など

とで悩まされた。またビザの延長問題ではトラぶった。ビジネスビザからワーキングビザに切り替えるのに、一旦中国の仁達浩特まで行き、再入国して、3ヶ月後に得られた。楽しかった旅行の一つに日本から

南ゴビの風景



D先生のゲルで迎えた旧正月



日本から来蒙した理科指導の先生方を迎えて、ゲル周辺で撮影



送別会で馬頭琴等のプレゼントを受けて

遊牧民の住居ゲル



総合学習の指導のボランティヤでY先生が来られた時、2泊3日の南ゴビの旅をしたことだった。1時間余りのフライトでゴビに着き、案内人のジープで広大な枯れ草の平原を走り、恐竜の発掘現場や鷲の谷などでカラバガンに出会ったり、ゴブ駱駝に乗ったりして楽しんだ。夜は大きく立派なゲルで泊した。

遊牧民は砂漠よりも草原で、ゲルを住宅にして、数百頭の羊や山羊を飼っている。ゲルの中はきれいに飾っている。

モンゴル人はパーティが好きだ。12月は新年の祝いを兼ねパーティが、会社や学校、大学で行なわれる。大学生も大きなパーティを企画し、先生方を招待して、音楽演奏、コント、ダンスなどで楽しませてくれた。その他ロシアアンデー(10月)、教師の日(1月)、婦人の日(2月)、旧正月の日(2月)、卒業式後(4月)等々、どれも日本とは一味違ったパーティだった。

私達の1年の活動は、冬季に発生した私の腰痛と妻のアイスバーンでの骨折が元で学年末の試験後の5月下旬で終止符を打った。

モンゴルは、この数年日本への関心が高まってきた。教育改革の目標は日本である。K氏の設立したNPO日本モンゴル教育交流協会での活動を通して、モンゴルに対する支援を継続していきたい。

落語をたのじみました。 教育後援会 小池正一

九月二十一日に、教育後援会主催で「古典落語鑑賞会」を開催いたしました。

田町の近くにゆかりのある落語というと浜松町辺りで「芝浜」、品川を舞台にした「居残り佐平次」という落語があります。知っている人は少ないし、聞いたことのある人はもっと少ないでしょう。

落語は、江戸から明治の東京を舞台にした、いわゆる古典落語といわれるものが、主流です。

落語は二十分以上かかるのが普通です。途中で切れません。テレビには向かない番組です。新宿「末広亭」などの数少ない寄席に行くか、公会堂などで開催される落語公演を聞きに行くかしないと、いろいろな落語を聞くことはできません。

映画などで有名な「牡丹燈籠」も落語なのです。三遊亭團朝という人が話をしたものです。明治の町にたくさんあった寄席を回り、続き続きで公演したそうです。

夏の月明かりの中、提灯を下げて寄席に集まってくる人たち。高座と客席をともし蠟燭のあかり。名人團朝の語る「牡丹燈籠」。

想像してみてください・・・。

立川談志師匠一門の立川談幸師匠にお話をして頂きました。息子さんが無事本校を卒業され、封印されていた本校での公演をお願いすることができました。

一番太鼓、二番太鼓、追い出し太鼓。今は寄席でしか聞けない、むかし町中に響いていたかもしれない太鼓の音を、ユーモラスに聞かせていただきました。

だんだんと、落語の世界に引き込まれていきます。

前ばなしを振って。一息入れて、「抜け雀」を語っていただきました。

長い歴史の中で培われた落語という芸を、楽しませて頂きました。言葉による表現の世界、その豊かさや笑うことの楽しさを少しでも生徒の皆さんに感じていただければと思います。

また、落語を聞くというのは、声だけではないのを、分かっていただけでは不十分でしょうか。

高座は、教師用の机と柔道部の畳で作り、上るための段を椅子などで応急的に作りましたので、安定感に欠けていました。そんな高座の上で、熱演していただき、談幸師匠ありがとうございました。

会場の設定等ご協力を頂きました先生、生徒、保護者の皆様ありがとうございました。

第一回古典芸能鑑賞会



北急の手作り高座で熱演の立川談幸師匠



お料理教室

坂田 充弘
附属高校教諭

保護者の皆様の多数の御参加によって、十一月十九日(土)に第二回、お料理教室を開催いたしました。昨年度と同じく、元東急レストラン本店の総料理長、大塚義夫シェフによる御指導をうけて、今年は一層を活性化させる朝ごはん!の料理に挑戦いたしました。学校の家庭科室をおかりして、参加者の皆様が部屋の中で、所狭しとクッキングに挑んでいました。シェフの説明や、手の動きを真似るように見つめて感動しながら、それぞれの方が実際に調理をいたしました。いつもキッチンに立っておられる主婦の方々はもちろん、ほとんど料理をしたことの無い参加者もあり、腕前の方はかなり差がありました。それでも各テーブルごとにグループとなり、和気あいあいと明るいお料理教室となりました。



出来上がったお料理をおいしくいただき、大変楽しい会になりました。保護者の皆様の御参加に感謝いたします。

バザー報告と

除細動機(AED)の寄付

益田 研一 附属高校教諭

バザー報告

文化祭期間中の十月八、九日の二日間にあわって、恒例の「教育後援会主催バザー」を開催致しました。例年にも増して在校生、賛助会員の方々から多くの品物が提供されました。ご協力をいただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。また、運営・販売にあたられた、後援会理事の皆様、そして特に精力的に販売していただきました坂田先生、本当にご苦労様でした。おかげさまで、盛況の裡に完了いたしました。あらためて御礼申し上げます。

除細動機(AED)寄付

例年、バザー売上金を附属高校に品物の形で寄付しているのですが、今年度は、校長、教頭、事務長と相談の結果、「除細動機(AED)」に決定しました。これは、初期の心臓発作等において非常に有効な器具とことです。十二月二十二日終業式の日には体育館前に設置されました。

なお、この「除細動機(AED)」は今回のバザー売り上げ金と、今年度予算の項目の教育補助費と合わせて購入いたしました。



おとがき



この号がとても素敵に出来ましたのは、ひとえに3年生保護者、山田晴久様の御協力のおかげです。山田さん、感謝いたします!

M S K M

教育後援会だより 第7号

平成18年3月1日発行

東工大附属科学技術高等学校
教育後援会

調布市国領町

一丁目三番一号

発行人 小林 晶子

印刷所

協和オフセット印刷(株)

☎〇三三三四三三三三六三八

